

指示詞「アノ」の一指導法 文学作品にあらわれる「アノ」の分析をもとにして

ワット・伊東泰子
インディアナ大学

Abstract:

Teaching the Demonstrative *ANO*:

Lessons from an Analysis of *ANO* in a Work of Modern Japanese Literature

Demonstratives are often referred to as *KO-SO-A* in Japanese; they are used to refer to (1) actual objects such as things, places, and people or (2) intangible objects such as a part or all of a previous conversation or writing. *A*-words can also be used in referring to some memory or recollection of the speaker (Horiguchi, 1978).

One of the problematic grammar points encountered in teaching Japanese is the use of *A*-words to point to other than real objects. Students often express their frustration in learning this type of demonstrative.

In this paper, I examine the use of *ANO* in the popular post-war novel *The Setting Sun* by Dazai Osamu. Dazai uses the demonstrative *ANO* frequently and with special effectiveness in this novel. Particular attention is given to *ANO* belonging to the second category noted above. On the basis of my analysis, I make suggestions concerning the teaching of *ANO* with the aim of helping students gain both passive and active knowledge of it.

0. はじめに

日本語を指導するにあたり、教師が遭遇する問題は数多いが、その中の一つに、指示詞の問題がある。指示詞は、「コソア」とも呼ばれ、(1)主に眼前にあるものを指す現場指示と、(2)発話あるいは文脈の一部、または全体を指す文脈指示とがある。その他にも、知覚指示、観念対象指示などと呼ばれるもの(堀口, 1978)もある。

学生の立場からみると、現場指示の「コソア」については、初級の段階で懇切丁寧な指導を受けるが、文脈指示またはその他の指示詞の使い方に関しては、系統立てて教えられていないようである。学生にとっては、「コソア」の中でも、「ア」の使い方がむずかしいらしい。「ソ」であるべきところに、よく「ア」を使いたがる。下記の文は日本語を始めて二年目の学生が書いたものであるが、日本語を指導する立場にあるものは、よくこれと同じような「ア」系の言葉に遭遇する。

先週、水曜日、たくさん雨が降ったから、合宿所の後ろの小川で水浴びをした。
水曜日の晩に勉強してから、あそこへ行った。あの小川に一匹のマスクラットが
住んでいる。私はあのマスクラットと話した。

この「アソコ」、「アノ」、「アノ」は担当の教師によって「ソコ」、「ソノ」、「ソノ」と添削されている。この場合、一概に「アソコ」、「アノ」、「アノ」は間違いであるとは言い難いが、やはり、「ソコ」、「ソノ」、「ソノ」の方が座りがいい。日本語には「コソア」という指示詞の体系が存在するのであるから、初めからこの三つの体系(佐久間, 1951)についてこまかく指導することができるに越したことはない。しかしながら、限られた時間の中で「ア」の指導ばかりしているわけにはいかないし、また、学習者側にも初級の段階では「ア」の現れる複雑な状況を見極める日本語能力が備わっていない。そこで、「ア」系の言葉(この論文では「アノ」

をとりあける)の指導をするに当たり、(a)パッシブな知識と(b)アクティブな知識の二つに分けて指導をしてみてもどうかという提案をしたい。そのために、まず「アノ」の類出する太宰治の『斜陽』(1982/1950)の中の「アノ」を、現場指示であるか否かの問を原点として分析し(追補フローチャート参照)、「アノ」を別の表現に置き換えても、あるいは、「アノ」を取り除いても、日本語の文としては成り立ち、「アノ」が必ずしも必要でないことを証明する。そしてその分析の結果をもとにして、上記(1)の現場指示の「アノ」は、初級の段階から徹底的に教え込むということを第一の提案としたい。そして、(2)の現場指示でない「アノ」の場合は、初級(もしくは中級)の段階では、パッシブな知識としての重要性を強調しながらも、「アノ」を使わなくてもすむ方法を提示し、この種の「アノ」の指導を、言語能力の向上と共に徐々に行なっていくてはどうかということを、第二の提案としたい。

1. 『斜陽』の中の「アノ」

日本語の上級のクラスで三度か四度『斜陽』を読んだが、『斜陽』を読みながら気がつくことは、「ア」系のことが頻繁にでてくることである。数多く現れる「ア」系の指示詞の中でも、「アノ」ではじまる言葉が圧倒的に多い。「ア」系の言葉が150ちかく使われているが、その中の94は、「アノ」である。太宰の最高作品とされる(奥野,1958)『人間失格』(1969/1948)の中には、「ア」系の言葉が80ちかく出てくるが、その60あまりは「アノ」になっている。『斜陽』を教材として使う度にこの「アノ」について学生から質問が出た。そこで、この『斜陽』の中の「アノ」に焦点をあててみたい。文学作品における「アノ」を分析して、即、指導法というのは、妥当ではないが、少なくとも日本語学習者を指導する時の助けにはなるかもしれない。

井手(1958)によると、「ア」系の言葉は、特別な文学的効果をもっているという。非特定の読者のために書かれる文学作品の場合、「ア」系の言葉を使うことによって、その作品が、あたかも特定の読者一人のために書かれたような錯覚を起こさせる効果があると言っている。「ア」系の言葉は、読者に作品への参加を促し、読者を作品の中に引き込む力があるのである。読者に甘える「あまえ」の「ア」と言ってもよい。

齊藤は、「太宰は内容に応じて文体を意識的に変えていった作家」という言葉を何かの本の中で読んだことがあると言っているが(1968,p.401)、確かに文学的効果を出すために、如何様にも文体を変えることのできた当時の人気作家であったのであろう。「ア」で始まる言葉も、意図的に使っていると思われるところがある。

2. 指示詞「アノ」の機能

まず、『斜陽』の中の指示詞、「アノ」の機能を下記の二つに分けてみる。

- (1) 現場指示
- (2) 現場指示でないもの

(1)現場指示とは、上述したように知覚可能な(堀口,1978;正保,1981)眼前にあるものを指している時のものであり(Kuno,1973)。(2)現場指示でないものの中には文脈指示、つまり目に見えるものではなく、先行文脈、先行談話を指すものと、独白、内言など話者の頭の中にあるものを指して言ったりする時に使うものがある(堀口,1978)。

2.1 現場指示

『斜陽』(1982/1950)には94の「アノ」が使われていることは前に述べたが、その中のたった1例のみが現場指示の「アノ」になっている。

夕方もかく、お母さまと支那間でお茶をいただきながら、お庭のほうを見ていたら、石段の三段目の石のところに、けさの蛇がまたゆっくりとあらわれた。お母さまもそれを見つけ、
「あの蛇は？」
とおっしゃるなり私のほうに走り寄り、私の手をとったまま立ちすくんでおしまいになった。(太宰, 1982/1950, p15)

初級の段階で導入される典型的な「アノ」のケースである。日本語を習い始めて間もない、「ロシア」の体系(佐久間, 1951)を習ったばかりの学生でも、この種類の「アノ」は、簡単に使えるはずである。これは、どうみても「アノ」がよさそうである。しかし、服部(1961/1968)が言っているように、方言によっては、「ソノ」で済ますことができるのかもしれない。目にみえるものを指しているのだから、「アノ」のかわりに「石段のところにいる蛇は？」と、詳しい描写を使って済ますこともできる。しかしながら、通常言葉は簡略化されることを考えると、「石段のところにいる」から「アノ」になることはあっても、反対の場合は起こりにくい。その上、「石段のところにいる蛇」とすると、「アノ蛇」と指定する場合と多少異なり、他にも蛇がいて他の蛇と対照させるというニュアンスがでてくることは、否めない。英語を母語とする学生は英語には二つの指示詞しかない(Halliday and Hasan, 1976)ためか日本語の二つの指示詞の体系をかえて喜んで受け入れたがる傾向もあり、この手の現場指示の「アノ」は、初級の段階で完全にマスターさせることができる。

2.2 現場指示でないもの

上記のたった一つの現場指示の例を除いて、残りの93の「アノ」が指しているものをグループに分けてみると、次のようになる。

1.	人	(52)
2.	時	(16)
3.	もの	(10)
4.	場所	(07)
5.	抽象概念	(04)
6.	出来事	(03)
7.	描写	(01)

2.2.1 構造上指示詞「アノ」が必要であるもの

現場指示でない「アノ」を検討して、まず、すぐに気付くことは、構造上どうしても(1)指示詞「アノ」を必要としているものと、(2)そうでないものがあることである。構造上「アノ」を必要としているものは形式名詞の類である。つまり、「～方」、「～お方」、「～頃」のみでは、話を通じない。ただし、「～頃」の場合、「あのルネッサンスの頃」、「あの麻薬中毒で苦しんでいた頃」などは、「～頃」がそれぞれ「ルネッサンス」、「麻薬中毒で苦しんでいた」で既に限定されているので、構造上、指示詞「アノ」を必要としないとみなした。「あたり」、「時」、

「日」、「夜」などは、普通名詞としても成り立つが、形式名詞的な役割も持っており、『斜陽』の場合は、文脈から見て、形式名詞とみなす方が適当であると判断した。

2.2.1.1 「人」を指す場合

現場指示を除いた93例のうち、41例が構造上「アノ」を必要としている。上記のグループ分けの中「人」を指す「アノ」が全体の半数以上の52もあったが、その中の28例は構造上「アノ」を必要としており、次のようになっている。

あの人	(18)
あの方	(05)
あのお方	(04)
あの人たち	(01)

これは、「アノ」で指されるものが先行文脈あるいは、先行談話の中に出てきてもこなくとも、「彼」「彼女」「彼ら」「彼女ら」あるいは、固有名詞で簡単に置き換えられるものである。例をみてみよう。

直治の弱味にすかさずに付け込み、いわば蛇のごとく慧く、私はバッグにお化粧品やパンなど詰め込んで、きわめて自然に、あのひとと逢いに上京する事ができた。

東京郊外、省線荻窪駅の北口に下車すると、そこから二十分くらいで、あのひとの大戦後の新しいお住居に行き着けるらしいという事は、直治から前にそれとなく聞いていたのである。(p.126)

この場合、「あのひと」は、「彼」にまた固有名詞である「上原」に、簡単に置き換えることが出来る。もちろん、「アノ」によって表される特別な感情は、どこかへ消えてしまうであろう。

2.2.1.2 「人」でないものを指す場合

『斜陽』の中には、「時」を指す「アノ」が16と「場所」を指すものが七つほどあるが、その中で構造上どうしても「アノ」を必要としているものは下記のように「場所」の場合ほんの1例のみで、「時」では12例ほどになっている。

場所	あのあたり	(1)
時	あの時	(8)
	あの日	(1)
	あの頃	(3)

「人」を指す「アノ」の場合は、「アノ」で指されているものが先行していても、先行していても、すべて「彼」「彼女」などの代名詞や、人の名前、つまり固有名詞で置き換えることができた。しかしながら、「時」や「場所」の場合は、(1)先行するものを指すものと、(2)そうでないものに分けて考えた方がよい。「ア」系の言葉には、先行するものを指す文脈指示の機能はないとする学者もあるが、この論文では、「アノ」で指すことのできるものが、何らかの形で先行している場合をひっくり返して、アナフォリックと呼ぶことにする。

2.2.1.2.1 アナフォリック

上記のあのあたり、あの時、あの日、あの頃など13例の中で、「あの時」の一例を除いて、12例は、何らかの形でその場所、時を指すものが文中に先行している。もっとも顕著な例をみてみよう。

私をはじめてあなたとお逢いしたのは、もう六年くらい昔の事でした。
あの時には私はあなたという人について何も知りませんでした。(p.86)

このあの時は先行句の六年くらい昔をさしている。先行文の中に、あの時の指すものがはっきり出てくるのである。これは、アナフォリックの代表とされるその時としても、日本語として問題はないはずである。もちろん、あの時とその時では、ニュアンスが少し違ってくる。その時とした場合には、このあの時によって表される「共通の知識」あるいは話者の内言的な追憶というようなものは、強調されなくなる。このように、「アノ」を「ソノ」に置き換えてもよいものが2例ある。

2.2.1.2.2 アナフォリックでないもの

アナフォリックでないもの、つまり「アノ」で指されるものが先行していないものは、次の1例のみである。

私はからだの寒くなるような気持ちで、つと立ってお縁側に出て、ガラス越しに見ると、沓脱石の上に蛇が、秋の陽を浴びて長くのびていた。私はくらくらと目まいした。

私はお前を知っている。お前はあの時から見ると、すこし大きくなって老えているけど、でも、私のために卵を焼かれたあの女蛇なのね。お前の復讐は、もう私よく思い知ったから、あちらへお行き。きつさと、向こうへ行っておくれ。(p.117)

これは、主人公である和子の心の中での独り言であるが、実際には、心の中で蛇に話しかけているようなものである。あの時というのは、私のために卵を焼かれた時というのが、あとに出てきているし、また、話の展開から読者には分かっているはずである。このあの時は、(a) 話者の和子と、(b) 話しかけられている聞き手の蛇と、(c) 読者を考慮に入れた非常に効果的な「アノ」と言える。たしかに、この場合はその時でもこの時でもおかしい。あの時でなければならない。この「アノ」のニュアンスを少なくとも上級あるいは上級以上の日本語学習者は読み取って欲しい。またその指導をすべきである。しかし、アクティブな知識としてはこのような「アノ」は、文学的効果は消失してしまうかもしれないが、「あの時」を「(私が) 卵を焼いた時」あるいは「(私に) 卵を焼かれた時」と置き換えても立派な日本語として成り立つ。つまり、「アノ」を使わなくてもよいことになる。

2.2.2 構造上、指示詞「アノ」を必要としないもの

現場指示でない93例の「アノ」のうち構造上必要なものが、「人」を指すもの28例と「時」を指すもの12例、そして「場所」を指すもの1例の合計41例あり、それはどれも他の表現で置き換えても日本語として成り立つことが判明したが、次に、構造上指示詞「アノ」が必要でない残りの52例に、焦点をあててみる。構造上「アノ」を必要としないものは、固有名詞、普通名詞の類である。まず、(1) 固有名詞と(2) そうでないものに分けて検討する。

2.2.2.1 固有名詞

あの細田さま
あの駒場のX（「。。。ほら、あの駒場の」とある宮様のお名前を挙げて、）」
あの小説家の土原さん
あのおステさんとかいう人
あのルネッサンスの頃

上の5例の場合、あの細田さまのみが、アナフォリックである。あとの4例では、話者の頭の中にあるものを指したり、何ページも前に出てきた出来事を指したりする時に「アノ」がつかわれている。

奥さんの端正なプロフィールが、水色の遠い夕空をバックにしてあのルネッサンスの頃の頃のプロフィールのようにあざやかに。。（p.156）

この「アノ」は、日本語としてなくてもなりたつものであるが、太宰は、「アノ」を固有名詞、「ルネッサンス」に冠することによって読者に参加を呼びかけ、読者に時間的に遠い昔、距離的に遠く離れたルネッサンスの頃を思い浮かべさせるのである。これは文学的に巧みな「アノ」と言えるであろう。

しかし、固有名詞の場合は、アナフォリックであってもなくても、「アノ」を取り除いてしまっても問題がない。もちろん、固有名詞の場合でも、土原さんが二人以上いたりすると、「あの土原さん」とほかの土原さんと区別する必要がある。また、いつもと同じ土原さんではなく、たとえばいつもは気難しいが、ある時非常に親切だったりした場合、「あの土原さん」はなかなかみられないという風に、区別しなければならなくなることもある。しかしながら、別に「アノ」を使わなくても、「土原さん」を「気難しい土原さん」「めずらしく親切な土原さん」と別の方法を使って、二人の土原さん、あるいは、一人の土原さんを二つの面から描写することもできるのである。この五つの例を上記の構造上必要な41例に加えると、93例の約半分の46例になり、あと残るのはすべて「アノ+普通名詞」の47例となる。

2.2.2.2 普通名詞

『斜陽』の場合は、普通名詞を指す「アノ」がもっとも多く、(1)アナフォリックのもの、(2)アナフォリックでないものに分けることができる。

2.2.2.2.1 アナフォリック

前に述べたように、ここでいうアナフォリックとは、「アノ」によって指されるものが、何らかの形で先行している場合をいう。例をみしてみる。

蛇の卵
火車
あの頃から、どうもお母さまは、めっきり御病人くさくおなりになった。
（p.43）

この場合の「アノ」は、蛇の卵を焼いてしまった時、火事の時を指しており、これも文脈指示の「ソノ」に置き換えることができる。もう一つ例をみてみよう。

御返事がないので、もういちどお手紙を差し上げます。こないだ差し上げた手紙は、とてもずるい、蛇のような奸策に満ち満ちていたのを、いちいち見破っておしまいになったのでしょう。本当に、私はあの手紙の一行一行に巧智の限りを尽くしてみたのです。(p.81)

先行文脈に「アノ」で指されるものが、出ているので、これも「ソノ」手紙で用が足りるはずである。このようなアナフォリックの「アノ」は、上述したように先行文脈、または先行談話を指す際、典型的なアナフォリックの機能を持つと言われる「ソ」系の指示詞、「ソノ」に置き換えることができる。置き換えることによって「アノ」によってあらわされる「共通の知識」などは失われることになるが、『斜陽』の中には、このような「ソノ」に置き換えられる「アノ」が、上記したように21例ほどみられるのである。

2.2.2.2 アナフォリックでないもの

アナフォリックでない場合は、前に述べたように内言、独白のように、話者の頭の中にあるものを指したり、『斜陽』の場合は、何ページも前に出てきた出来事を指したりする時に、「アノ」がつかわれている。全体でこの種類の「アノ」は、26例、固有名詞の場合も、アナフォリックのものは1例のみで、あとの4例は先程の「あのルネッサンスの頃」も含めて、やはりこの種の「アノ」である。しかし、固有名詞はすでに分析済みであるので、この26例の中には入れていない。『斜陽』にあらわれる94の「アノ」のうち、30（普通名詞26+固有名詞4）、約三分の一はこの種の「アノ」である。例をみてみよう。

どうしても、もう、とても、生きておられないような心細さ。これが、あの、不安、とかいう感情なのであろうか、.. (p.52)

これも、別に「アノ」がなくても日本語としては十分なのである。「アノ」を加えることによって、読者を作品の中に引き入れることに、成功していると言える。

僕は昔から、西片町のあの家の奥の座敷で死にたいと思っていました。(p.160)

読者を巻き込もうとしない限り、わざわざ「西片町のあの家」としなくても、「西方町の家」であっても、なんら問題はないはずである。

何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。(p.9)

これも読者に参加を求める、行々の「アノ」であろう。この30の「アノ」はどうしてもパッシブな知識として習得して欲しいものである。しかしながら、完全に切り除いてしまっても立派な日本語として成り立つ。

3. 日本語習得を指導する立場から

以上『斜陽』の中の「アノ」を別の表現で置き換えたり取り除いたりしても日本語として立派に成り立つことが証明された。この結果をもとにして、日本語を指導する立場から考えると、上述したようにパッシブな知識（他の人が使う「アノ」を聞いたり読んだりして理解することができること）と、アクティブな知識（自分で「アノ」を発話あるいは作文の中に使うことができること）に分けて指導する方が、よいように思われる。

3.1 パッシブな知識

パッシブな知識として、特に文学作品を読む場合には、「アノ」のニュアンスを正しく読み取ることのできる知識が必要である。東アジア言語文化を専攻する学生の中には、ある作家、あるいはトピックをとりあげ、学生論文や修士論文の一部としてまだ翻訳されていない作品の翻訳を添えるというケースが、よく見られる。そのような場合、「アノ」に含まれているニュアンスを読みとらせ、翻訳させるのに苦労することがある。

別にこれといって指されるものが先行しておらず、文学的効果のために加えられたと思われる「アノ」が30例あったが、ドナルドキーン訳の『斜陽』(Dazai,1956/1950)の中に、この30の「アノ」がどのように翻訳されているか検討してみると、次のようなものが見られる。確かに「アノ」を翻訳しようとした努力のあとが見られる。

<u>あの</u> 奇妙な…叫び声	<u>that</u> strange [faint cry]
<u>あの</u> 小説家の土原さん	<u>that</u> novelist Uchara
<u>あの</u> 大師匠さん	<u>that</u> artist
<u>あの</u> 直治のマスク	<u>that</u> mask Naoji recommended
<u>あの</u> 半気違い	<u>that</u> halfmad
<u>あの</u> 小さい犠牲者	<u>that</u> little victim

わざわざ the でなく、that とすることによって、「アノ」のニュアンスが出るかどうかは別として、この「アノ」のニュアンスを読み取らせる指導をする必要があろう。

3.2 アクティブな知識

前にも述べたように、日本語には、「コソア」という体系が存在するのであるから、初めからその二つの体系について丁寧に教えることができるに越したことはない。しかしながら、時間が限られているので、たいていの教科書では、典型的な現場指示の「コソア」を初級の段階で導入するにとどめられている。現場指示以外の「コソア」に関する日本語教育現場での実際の指導時期、指導方法については、調査をしてみる必要があるが、現場の教師とのインフォーマルな会話から推して見る限り、あまり系統だてて教えられていないようである。学生の側からみると、現場指示以外の用法があるということは非常に早い段階で分かるが、その用法については、今一つ把握がたいものとなっているのではなからうか。

『斜陽』を読んで判明したように、文学的効果を狙うのでなければ、「アノ」の存在が薄れてくることは、既に述べた。元来、歴史的にみると、「コ」と「ソ」の世界に「ア」が後れて現れてきたのであり(吉田,1980)、現在でも、沖縄の方言には「ア」系の言葉を使わず、「コ」と「ソ」で用を済ますところがあるという(橋本,1966)。また村上春樹の作品の中の短編、『めくらやなぎと眠る女』(1990a)の中には「ア」系の言葉が一つ、『納屋を焼く』(1990b)『蜚』(1990c)

にはそれぞれ二つか三つの例しかみられない。また、「ア」系の言葉が多く使われていると思われる『踊る小人』（1990d）にしても、10例足らずとなっている。もちろん『斜陽』の全体語数と村上のこれらの短編の全体語数を比較して「ア」系の言葉の数を比べてみるのが妥当であるが、そのようなことをするまでもなく、村上の短編の中には、「ア」系の言葉が少ないことがはっきりしている。村上が「ソ」系の言葉を使っているところに太宰だったらきっと「ア」を選んだだろうと思われるところもある。村上のように「ア」を使わなくとも立派な文学作品とされるものが出来上がっているのである。しかしながら、これは、あくまでもスタイルの問題であり、谷崎が言っているように日本語の美しさは、上のことを言うのに七で済ませ、あとの三は、相手の推量に任せるところにある（1957）とすると、「ア」系の言葉は、すべてを言葉にして言うことなく相手に甘えるのであるから、その谷崎の言う日本語の美しさを保つ上で、不可欠のものとされる。

5. 最後に

『斜陽』の「アノ」を分析して、文学作品を読む場合の留意点を考えるのならまたしも、「アクティブな知識」を習得させるために云々ということは、必ずしも妥当でないことは既に述べた。しかしながら、日本語の習得を指導する立場からみて少なくとも結論として言えることは、次のことであろう。

1. 現場指示の「アノ」は他の描写法を用いて言い表わすことができるが、やはり日本語には「コソア」の体系が存在するのであるから、簡潔な「アノ」の初級段階での導入を続けた方がよい。現場指示の「アノ」は学習者にとってはむしろかしくない。しかし、この時点で「ア」は目に見える現場指示に使う、つまり目に見えないものには絶対に使ってはいけないということを特にはっきりさせておくと、この論文の冒頭で紹介した学生の作文に見られるような「ア」の使い過ぎを防ぐことができる。

2. 現場指示以外の「アノ」に関しては、それぞれのカリキュラムを考慮に入れた上で、中級レベル程度から少しずつ指導していったらいいのではなかろうか。その場合、まず、アナフォリックの「ソノ」の使い方(Tsutsui,1990)の指導から始め、ある程度アナフォリックの「ソノ」が上手に使えるようになった頃を見計らって、「ソノ」を「アノ」と対比させながら指導するとよい。

3. 現場指示でもなくアナフォリックでもない「あのルネッサンスの頃」や「西片町のあの家」などにみられる「アノ」は、話者の頭の中に存在するものを指すものである。太宰治と村上春樹の違いに見られるように、その使い方には個人差もあることであり、どの程度「アクティブな知識」としての習得を指導するかには、疑問がある。この種類の「アノ」は、「パッシブな知識」としては不可欠のものであるが、「アクティブな知識」としては学習者の言語能力の向上と平行して、自然に習得されるものとみなしてよいと思う。

参考文献

- 井手至（1958）『代名詞』『続日本文法講座』文法各論編 東京：明治書院，pp.111-133.
奥野健男（1958）『太宰治』現代作家論全集 10 東京：五月書房
齊藤かほる（1968）『太宰の文体』『太宰治の研究』東京：新書社

- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 改訂版』 東京: 厚生閣
- 正保勇 (1981) 「「コソア」の体系」『日本語の指示詞』日本語教育指導参考書8
東京: 国立国語研究所
- 谷崎潤一郎 (1957) 「現代国語文の欠点について」『谷崎潤一郎全集 第21巻』
東京: 中央公論社
- 太宰治 (1982/1950) 『斜陽』 東京: 角川文庫
- 太宰治 (1969/1948) 「人間失格」『現代日本文学大系』77 東京: 筑摩書房 pp.136-184.
- 橋本四郎 (1966) 「古代語の指示体系 - 土代を中心に」『京都大学文学会国語学論集』5, 6
pp.329-341.
- 服部四郎 (1961) 「「コレ」「ソレ」「アレ」と this, that」『英語青年』107(8) pp.412-413.
- 服部四郎 (1968) 「コレ、ソレ、アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』
東京: 三省堂 pp.71-81.
- 古田東湖 (1980) 「コソア下研究の流れ (一)」『東京大学人文科学紀要』71 PP.119-156.
- 樋口和吉 (1978) 「指示詞『コソア』考」『論集日本文学日本語5 現代』
東京: 角川書店 pp.137-158.
- 村上春樹 (1990a) 「めくら柳と眠る女」『村上春樹全作品 1979-1989, 3, 短編集1』
東京: 講談社 pp.[261]-297.
- 村上春樹 (1990b) 「納屋を焼く」『村上春樹全作品 1979-1989, 3, 短編集1』
東京: 講談社 pp.[235]-259.
- 村上春樹 (1990c) 「蜚」『村上春樹全作品 1979-1989, 3, 短編集1』 東京: 講談社 pp.[205]-234.
- 村上春樹 (1990d) 「踊る小人」『村上春樹全作品 1979-1989, 3, 短編集1』
東京: 講談社 pp.[299]-328.
- Halliday, M.A.K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London and New York: Longman
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Tsutsui, Michio. 1990. "A Study of demonstrative adjectives before anaphoric nouns in Japanese.
In O. Kamada and W. M. Jacobsen (Eds.), *On Japanese and How to Teach It: In Honor of
Seichi Makino*. Tokyo: Japan Times. pp. 121-135.

本研究は1996年6月23日にハーバード大学に於て開催された「第十回ニューイングランド地方日本語教育学会」での発表に基づいたものである。

池田奈美、角谷明子、片岡由紀夫、鈴木順子、三浦宏一諸氏には初稿をお読みいただき貴重なコメントをいただいた。また菅作靖彦氏には論理展開の上でアドバイスをいただいた。

